

常澄村文化財調査報告 第4集

大串貝塚

茨城県常澄村教育委員会

平成三年三月

題 字 中 村 政 (常澄村教育長)

序

国指定史跡「大串貝塚」は、西暦713年（和銅6年）、元明天皇の詔りによって編さんされた『常陸国風土記』に記されており、巨人伝説を記したもとしては文献に遺る世界最古の貝塚として、古くから注目されてきました。

この貝塚は、昭和初期から幾度かの発掘調査によってその姿が解明されてきましたが、貝塚は地下に埋藏されていることから、その範囲を完全に把握することは極めて困難でありました。

このたびの調査は、本村においてこの「大串貝塚」を中心とする歴史公園整備事業の貝層断面観覧施設建設に伴う、貝塚の範囲確認と保護の資料を得るために、国庫及び県費補助を受けて実施した次第であります。

調査にあたりましては、茨城県教育庁文化課ならびに水戸教育事務所よりご指導ご助言をいただき、事前に十分に協議を重ね、日本考古学協会員井上義安氏に担当いただき実施いたしました。

調査の結果、区域内から数々の縄文時代の遺物等、この地域における古代人の生活の一端を知る上での貴重な資料を得ることができましたことは非常に幸運であり、また、今後この調査結果が埋藏文化財の保護保存をはじめ、かけがえのない貴重な文化財に対する認識と遺跡愛護の精神を培う上で、広くご活用いただければ幸いに存じます。

終りに、本調査と本書の作成にあたり、ご尽力いただきました井上義安先生をはじめ、調査関係者の方々、ご指導ご協力いただきました茨城県教育庁文化課ならびに水戸教育事務所の諸先生方、その他数多くの関係者の皆様方に対し、心から深甚なる感謝を申し上げます。次第であります。

平成3年3月

常澄村教育委員会
教育長 中村 政

例 言

- 1 大串貝塚は、茨城県東茨城郡常澄村塩崎に所在する。
- 2 本調査は、大串貝塚の貝層断面観覧施設建設にあたり、貝塚の範囲確認および保護の資料をうるための確認調査で、国庫および県費補助を受けて実施した。
- 3 確認調査は、平成2年10月17日に開始し、同年10月29日に終了した。
- 4 確認調査の面積は150㎡である。
- 5 確認調査は、常澄村教育委員会が井上義安を担当者とし、鈴木浩子・水谷 正・李 舜雨の協力を受けて実施した。
- 6 本書に掲載した写真は、井上義安・内藤 彰が撮影したものである。
- 7 出土遺物の整理と図面の作成は、井上義安・水谷 正・鈴木浩子が従事した。
- 8 出土遺物の整理は、平成2年11月1日から平成3年2月10日まで行った。
- 9 出土遺物は、常澄村教育委員会（東茨城郡常澄村大字大串961の1）に保管されている。

本文目次

序	常澄村教育委員会教育長 中村 政
例言	
本文目次	
挿図目次	
図版目次	
第一章 貝塚の位置と自然環境	1
第二章 貝塚の調査略史	3
第三章 確認調査の経過と概要	5
第四章 出土遺物の概要	11
第五章 まとめ	17

大串貝塚確認調査関係者

挿図目次

第一図 大串貝塚付近地形図	2
第二図 確認調査区域図	6
第三図 確認調査トレンチ図(1)	8
第四図 確認調査トレンチ図(2)	9
第五図 出土遺物土器 (A 貝層 1～5・B 貝層 6～22) 実測図	12
第六図 出土遺物土器 (C 貝層 23～27) 実測図	13
第七図 出土遺物石鏃・貝刃実測図	14
第八図 ヤマトシジミ殻長分布図	15

図 版 目 次

- 図 版 第 一 貝塚の遠景〈南より〉
貝塚の遠景〈東より〉
- 図 版 第 二 確認調査地区の現状〈西より〉
確認調査地区の現状〈東より〉
- 図 版 第 三 第1区東壁の土層堆積状態〈西より〉
第1区南壁の土層堆積状態〈北より〉
- 図 版 第 四 第2区南壁の土層堆積状態〈北より〉
第3区南壁の土層堆積状態〈北より〉
- 図 版 第 五 第4区南壁の貝層・土層堆積状態〈北より〉
第4区南壁の貝層・土層堆積状態〈北より〉
- 図 版 第 六 第4・5区南壁の土層堆積状態〈北より〉
第6区南壁の土層堆積状態〈北より〉
- 図 版 第 七 第4区A貝層の状態〈北より〉
第4区B貝層の状態〈北より〉
- 図 版 第 八 第4区C貝層の状態〈西より〉
第4区C貝層の土器出土状態
- 図 版 第 九 縄文土器 (A・B貝層出土)
- 図 版 第 一〇 縄文土器 (C貝層出土)
石鏃・貝刃
- 図 版 第 一 一 動物遺存体 (貝類, 獣類, 魚類)

第一章 貝塚の位置と自然環境

大串貝塚は、茨城県東茨城郡常澄村塩崎に所在し、縄文時代の前期前半に形成された遺跡である。県都水戸市の北部を蛇行しながら東流し、那珂湊市・大洗町の河口近くで濁沼川と合流して太平洋に流入する那珂川は、左岸に勝田台地、右岸に水戸東南台地を形成している。貝塚が占地するのは後者の右岸台地である。この台地は、河口方面に向かって発達し、その先端部付近において標高が18～15mを測り、三角形状を呈して東に突出する。大串台地の東南一帯には、那珂川と濁沼川が形成した標高2.0m前後の沖積地が約2.5kmほど続き、その先に大洗の洪積台地が存在する。

一方の左岸に対峙する勝田台地は、那珂川と中丸川の間発達し、幅1.0km弱、標高25～19mを有して、河口の那珂湊市方面にのびている。那珂川を介した両台地間の直線距離は約3.0kmあり、ここにも広大な沖積地(標高4.0m前後)が展開する。大串貝塚から河口の岩礁までは約4.0kmと至近の距離である(第一図)。

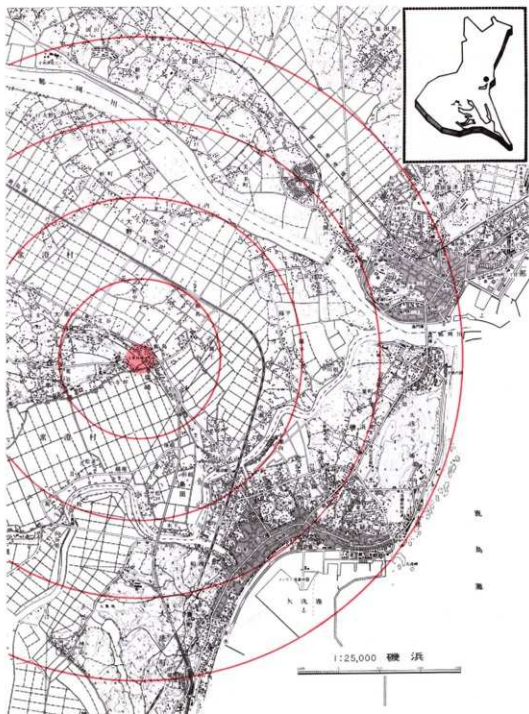
縄文時代の前期、すなわち大串の丘に貝塚が形成された頃は、いわゆる海進の最盛期であった。この付近の地形は、小池一之氏によると、上位段丘、中段段丘Ⅰ、中段段丘Ⅱ、後ローム段丘、沖積地に分け、上位段丘には久慈川～那珂川間に分布する那珂台地、那珂川～濁沼川間に発達する東茨城台地が相当する。中段段丘Ⅰは下流域両岸にほぼ連続的にみとめられ、水戸市谷田で高度25m、現河床との比高23m、さらに下流の常澄村塩崎で高度20m、現河床との比高20mである。中段段丘Ⅱは中段段丘Ⅰとの比高が約10mの段丘で、前記谷田付近で海拔13m、大洗町磯浜付近で海拔10mを示し、中段段丘Ⅱ形成時の旧汀線高度は海拔0～5mであったと推定している。そして中段段丘Ⅰの現河床との比高からみて、少なくとも中段段丘形成後は地盤上昇はほとんどないという¹⁾。

かつて私たちは、下流域における縄文時代前期の貝塚形成時の汀線高度について、大串貝塚と小川貝塚の事例から海拔3.5～4+amであろうと推測したことがある²⁾。

現在肥沃な水田地帯となっている広大な沖積地は、台地の近くまで海水の影響を受けた汽水域がみられ、各所に砂泥底のラグーンが形成されていたことは確実である。湾口部の水域にはクロダイ・スズキ・ドチザメ・ボラなどの魚類が棲息し、ラグーン内にはヤマトシジミやイソシジミなどが繁殖する環境であったと考えられる。一方、台地の森林は哺乳動物のイノシシ・シカ・タヌキ・テンなどの住処として好条件の場所であったと思われる。

1) 小池一之「那珂川流域の地形発達」地理学評論34-9 昭和36年(1961)

2) 井上義安・平山 猛「那珂湊市山崎遺跡Ⅰ」那珂川の先史遺跡4 昭和46年(1971)



第一図 大串貝塚付近地形図

第二章 貝塚の調査略史

奈良時代の和銅6年(713)に編さんした『常陸国風土記』には、巨人の所業と結びつけた大串貝塚の説話が記載されていて、古代律令社会の人々の貝塚に対する理解を窺う貴重な記録であり、同時に貝塚のことを記した文献としては、世界的にも最古のものといわれている。

近世に入ると水戸藩の修史事業においても、大串の貝塚は中山信名、宮本茶村などの碩学によって注目されてきたが、その考説は巨人伝説の域をでるものではなかった。

明治20年代になると、吉田東伍、坪井正五郎、若林勝邦、八木契三郎、川角寅吉、辻武雄らにより、風土記の巨人伝説に関連して、大串貝塚の問題が種々な角度から論じられるようになり、貝塚は石器時代の遺跡であるという認識が定着してきたのである。

昭和11年8月は、大串貝塚にとってはじめて学術調査が行われた記念すべき年であった。発掘は、大史前学研究所主宰のもとに田沢金吾、大場磐雄、池上啓介、宮崎 糺らが実施した。その結果は、『史前学雑誌』第9巻第2号に「大串貝塚」として発表されている。貝層の分布は、台地上畑地(常澄中学校敷地)のA地点、南側の傾斜地下端部のB地点、東側傾斜地のC地点の3か所に認められ、縄文時代前期のヤマトシジミを主体とした貝塚であることが明らかになった。発掘資料は、第2次大戦で東京が空襲をうけた際に焼失し残っていない。

ついで昭和18年6月23・24日の両日、酒詰伸男、広瀬栄一らが試掘程度の発掘を行い、戦後の昭和24年に日本考古学研究所の『日本考古学』第1巻第5号に「茨城県大串貝塚調査報告」として公表した。しかし、僅か2日間という短日時の発掘であり、3地点からなる貝塚の貝層の分布・積成状態などまで把握することは困難であった。

戦後、私たちも部分的に小発掘を行ったことがある。その時の資料は、昭和41年4月『茨城先史学研究』1に出土土器を中心として発表した。いずれにしても、貝塚の全体像はほとんど明らかにされていない。

大串貝塚が国指定の史跡となったのは、昭和45年5月11日である。その後、県史編さん事業の中で貝塚の測量図が作成された。これは縄文前期貝塚の貝層分布のありかたを提示した資料として、大変意義のある作業といわねばならない。

常澄村教育委員会は、昭和60年8月17日-9月4日まで、南側傾斜地のB地点の道路を挟んだ東・西の2か所(B1・B2地点)における貝層分布の確認を主とした調査(担当川崎純徳)を実施した。翌61年3月に刊行した報告書によると、B1地点には予想もなかった厚さ1.5mの良好な貝層が出現し、その積成状態が詳細に記録できたことは幸いであった。貝層からは、縄文前期の繊維土器(花植下層式・二木併行式)に加え、昭和11年の発掘資料にも増して多くの動物遺存体(腹足綱14種、斧足綱14種)が検出された。また従来ほとんど知られていなかった鹿

角製釣針、刺突具、貝刃などが多数出土し、あらためて大串貝塚人の漁撈活動の内容を考え直す必要があるように思われる。

以上のような調査研究を踏まえて、今回は、『大串貝塚周辺におけるふれあいのまちづくり』事業の一環として、貝層断面観覧施設の建設に伴う、貝塚の範囲確認および保護の資料をうるための確認調査を実施した。調査地点は、先年発掘した B1 地点貝塚の北側に続く旧簡易水道施設の跡地である。確認調査は、平成 2 年 10 月 17 日から同月 29 日まで行った。

第三章 確認調査の経過と概要

昭和60年の調査において、B1地点と仮称して発掘した場所は、折居神社の南西に当たる斜面から裾部にかけての部分である。裾部付近は、民間の住宅建設による削土工事が行われ、そこには良好な貝層の堆積も認められていた。発掘調査は、この地点を選び、ほぼ南北方向にトレンチを設定して行った。今回の確認調査と関係する地点なので、その時の調査概要（鈴木素行執筆）を再録し、今次調査の参考にしたいと思う。

1 B1地点の調査概要（昭和60年8月17日 — 同年9月4日調査）

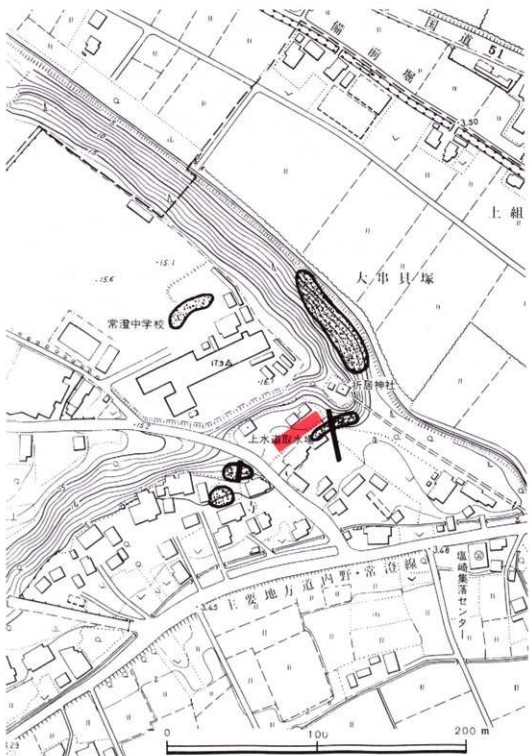
大串貝塚B1地点のトレンチは、貝層の平面分布のうち南北方向の範囲、特に南側限界の把握と、貝層の垂直分布の調査を主目的として設定されたものである。トレンチは、東西の幅1.5m、南北の長さ29.5mで設定され、南端を起点として1m毎の区に分けて表記することにした。現在の地表は、トレンチの18～23区で約30度の傾斜になっており、調査以前に斜面の一部が削られて、20～21区西側で貝層の断面が露出した状態にあった。そこで、20～21区を中心として南北それぞれの方向に貝層の上面を追跡しながら調査を進め、最終的には貝層の範囲を含む15～25区について調査を実施した。貝層は、18～23区に分布し、標高4.7mから6.8mにかかる約20度の傾斜面に堆積している。最も厚い部分で約1.4mを測る貝層の堆積は全て、縄文時代前期の花積下層式期に形成されたものである。

貝層は、斜面の削平以外にも、18～19区を東西に横断する溝状の堀り込みによって攪乱を受けている。このため、貝層の南側末端部を確認することができず、15～18区に堆積する第8～12層との層序関係も明らかにし得なかった。但し、第11層からは浮島式土器が出土しており、第8～11層は、花積下層式期の貝層よりも新しい時期に堆積したと考えられる。実際には、第12層と貝層との前後関係のみが不明である。第12層は遺物包含層であり、これによって貝層の南側限界を越えて遺跡の範囲が拡大することが明らかにされた。しかし、標高3.5m付近から地下水が湧出してトレンチの下底が水没するために、0～15区へ調査区を拡張して第12層を追跡することは不可能であった。また、貝層下にも遺物包含層の存在することが明らかにされたが、基盤層を確認するには至らず、第32層を遺物包含層の最下層として捉えるに止まった。

調査においては、主に平面的な観察から仮層位番号を付して分層発掘を行った。最終的な層位番号は、30層に分層される土層・砂層・砂礫層を、トレンチの東壁セクションを基本として整理したものである。

2 今回の調査概要（平成2年10月17日 — 同年10月29日調査）

調査区の現状 B1地点の貝層は、標高5～8mの斜面にあつて、ほぼ東西方向に細長く帯



第二図 確認調査区域図

状に残っている。昭和60年に東端の部分が発掘されるに及んで、その貝層の形成過程が明らかとなった。貝層の上段は、東側の国指定史跡のC地点と同様に、もとは傾斜地を形成していた。けれども、ここ大串の台地先端部には、表土・ローム層の下に良好な礫層が厚く堆積しているために、戦前・戦後のながいあいだ、地域住民の農道路面補修用の砂利採掘場となり、標高15mから8m付近まで大きく削除し、いつしかそこには平坦な広場が造成されてしまった。

昭和35・36年になると、この場所に簡易水道南地区機場を建設して給水事業を行なってきたが、最近上水道事業の前期工事が完了したので、一部の施設を残し配水池、沈砂地、排水池、配水ポンプなどは撤去されている（図版第二参照）。

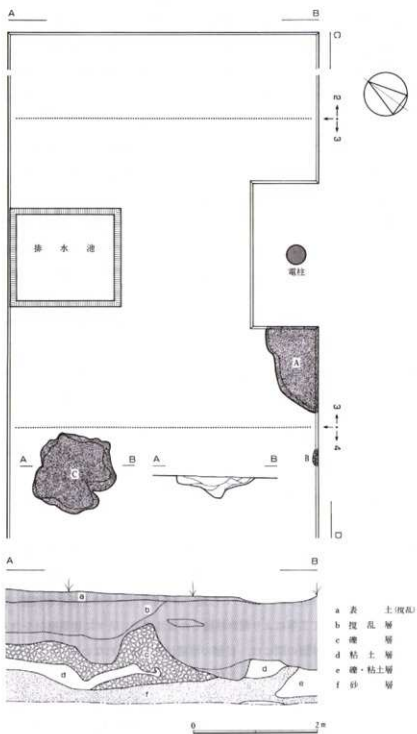
確認トレンチの設定 先に調査したB1地点トレンチにおける貝層の堆積状態、水道機場跡地の現状を考慮して、確認トレンチの設定場所は、本地点貝塚の上端部北側（跡地の南側）を選んだ。これは貝層断面観覧施設の建設に当たって、貝層のひろがりがこの跡地内にまで及んでいるかどうかを確認するためであった。トレンチは、折居神社境内に接する跡地境界から北東-南西方向に長さ30m、幅5mで設定し、北東壁から5mごとに1～6区に分けて調査することにした。

トレンチの概要 トレンチ内は、水道機場の跡地であるために、これに関連した施設の建設と撤去時に掘削工事が行われている。とくに1区と2区の境界付近の北壁寄りには、急速濾過器（撤去）、3区の北側にコンクリート製の排水池、同南壁に接して電柱などがあり、この周囲一帯は深さ2mに達する攪乱が存在する。また4～6区においても、浅いところで約50cm、深いところが1m前後に攪乱を受けた跡が認められる。

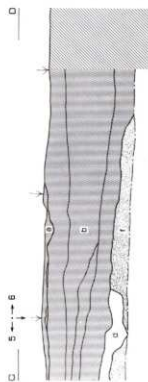
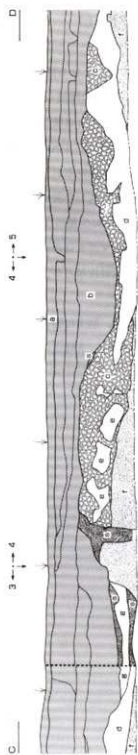
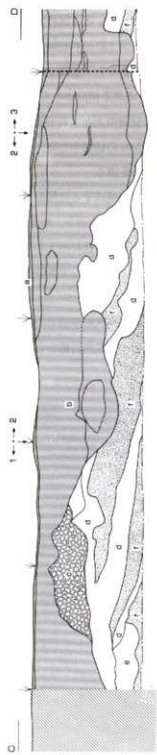
土層の堆積状態 確認調査区の土層は、B1トレンチの上端部に近接する北東壁をA-B断面、南西方向の東南壁をC-D断面として観察記録した。

A-B断面（第三図、図版第三）の所見は、現地表面下1.3～1.4mのところに堆積する茶褐色～暗褐色の砂層fの上部に、小砂利を部分的に混在した灰褐色の粘土層d、礫と粘土を混じえた層e、直径3～5cm程度の赤褐色礫を主体とした層cが堆積する。その上部に砂利層、粘土層が厚く存在するが、これはすべて工事により掘削移動した攪乱層で、所々に建築廃材を含んでいる。この攪乱層の下から基盤の砂層の間には、貝層の堆積は全くみられないので、B1地点の貝層上端部はここまでのびていないことが明らかとなった。

C-D断面（第四図、図版第四）の所見は、各区によって深度が相違するけれども、全面にわたる工事の攪乱が存在する。とくにそれが甚だしいのは、排水池や電柱のある2～3区間で、深さ約2mの基盤の砂層にまで達している。各区に共通する大別層序は、灰褐色、黄褐色、茶褐色の砂層fが基盤となり、その上に粘土層dや礫層cが堆積して土層が形成される。1区と2区の攪乱が浅い部分の断面を観察すると、砂層と粘土層が交互に重なりあい、礫層に移行する層序がみ



第三図 確認調査トレンチ(図1)



- a 表土層
- b 腐乱層
- c 硬土層
- d 粘土層
- e 硬粘土層
- f 砂層
- g 黑色土層
- s 貝

第四図 確認調査トレンチ図(2)

られる。これが調査区の本来的な土層の堆積状態を示すものであろう。

貝層の堆積状態（第三・四図，図版第五・七） 貝層は3区の1地点（A）と4区の2地点（B・C）に出土した。A貝層は、電柱のあるコーナー部分の砂層上に、80×130 cmの範囲で確認され、断面で観察すると厚さ10 cm前後の黒色土を挟み、5～10 cmの厚さで上下に薄く堆積する。B貝層は、砂層の細いくぼみの中から上方に堆積し、A貝層の方にひろがる傾向がみられる。おそらく下方に移行すれば同一の貝層になることは確かであろう。この貝層の上面は若干削平され土砂と一緒に西側へ移動している。C貝層は、4区の現地表面下約1.5 mの砂層中に発見された。直径は1.3 mの不整形を呈する。深さは中央部がくぼんで25～36 cmを測る。

3地点の貝層は、いずれも僅かに土砂を混入した混土貝層である。貝層を構成する貝種をみると、ヤマトシジミが主体となっており、これに少量のマガキ、ハマグリ、稀にアカニシ、サザエ、ヒタリマキマイマイなどが混入する。特にマガキは各貝層とも数個体がブロック状に出土した。

貝層中には、土器破片、石器、魚骨、獣骨片などが含まれているが、その量は決して多いものではない。

貝層の形成時期 貝層出土の土器は、胎土に植物性繊維を含んだ縄文時代前期前半の花積下層式～二ツ木式期に比定できるものである。3地点の貝層は、出土土器の型式的特徴から、この時期に形成されたものと考えられる。

第四章 出土遺物の概要

今回の確認調査によって検出した三つの小貝層からは、人工遺物として土器、石器、貝刃、動物遺存体として貝類、魚骨、獣骨などが出土している、それらの概要は次に述べるとおりである。

1 土器（第五・六図、図版第九・一〇）

①A貝層出土土器	口頸部破片7	胴部破片51	底部破片1	合計59
②B貝層出土土器	口頸部破片7	胴部破片20	底部破片1	合計28
③C貝層出土土器	口頸部破片6	胴部破片2	底部破片0	合計8

上記の三貝層から発見した土器破片の総数は95個である。土器は、すべて胎土に植物性繊維を混入している仲間で、破片から推察できる器形は口縁部を僅かに外反させた深鉢形を呈する。

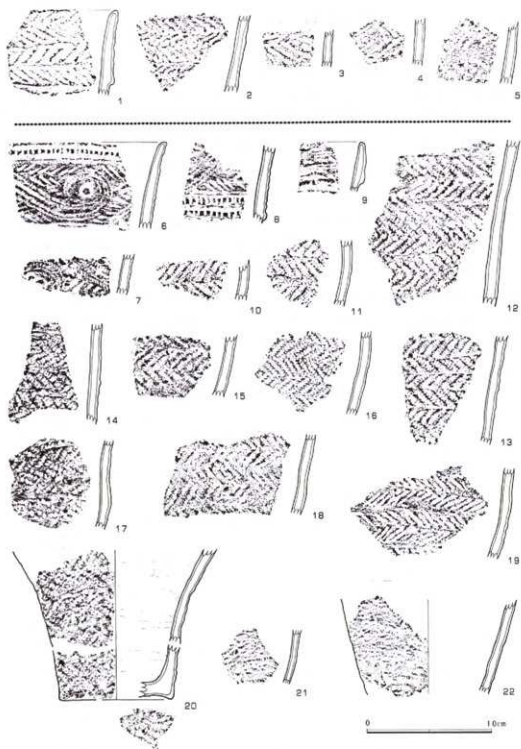
①A貝層出土土器（1～5）口縁部に幅広い緑帯部を有する1は、長さ約1.5cmの短い縄文原体を羽状に押捺する。胴部の文様はループ文や縄文を押捺して羽状の構成となる。

②B貝層出土土器（6～22）口縁部には緑帯部を欠く6と緑帯部を形成する9が存在する。前者は、口縁と頸部に細かい刻目を付した隆帯を横位に施し区画した内部に、撚りの異なる2本1組の撚糸圧痕文を蕨手状に押捺し、その中心や他の部分に円形竹管文を配し、さらに短い沈線を充填した構成である。後者は、緑帯部に刺突文や撚糸圧痕文が加えられる。胴部は、羽状縄文による施文が旺盛にみられ、原体を結束したものとしないものがある。底部は上げ底状を呈し、底面にも縄文が押されている。

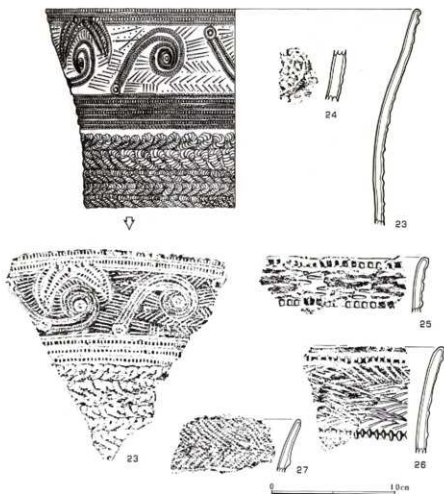
この一群とは別に網目状文の土器21・22がみられる。これはいわゆる単軸絡条体第5類による網目文で、細い丸棒に撚糸を左と右から捲きつけた原体で回転した文様である。

③C貝層出土土器（23～27）口縁部から胴部に至る大型破片23を観察すると、口縁部は弱く外反しながら開く深鉢形の器形を呈する。文様は口頸部と胴部に別れる。口頸部の文様帯は、口縁に2条、頸部に3条の細い隆帯をめぐらして区画をつくり、各隆帯上には縦に刻目を施し、隆帯間のぐばみに撚糸圧痕文を押捺する。撚糸圧痕文はすべてS・Z撚りの2本が1組となって、下方と上方から蕨手状の構図を描き一周する。その場合に蕨手文は上向きと下向きが交互に表出されるようである。各蕨手文の空間には、刻目のある隆帯、撚糸圧痕文、円形竹管文、刺突文、短い沈線文、瘤状突起などが配される。胴部にはループ文（環付縄文）を押捺しているので、この文様が底部まで重畳するものとおもわれる。本土器の口頸部文様帯に瘤状突起、胴部文様帯にループ文を採用した点は、花積下層式の中から関山式に移行する新しい要素と考えられよう。

この他に撚糸圧痕文と沈線文を施文した口縁部破片24がある。25と26は、口縁部の上下に隆帯をめぐらして刻目を加え、その区画内に沈線を横位または羽状に充填したものである。27は肥厚する緑帯部で縄文を羽状に押捺している。



第五图 出土遺物 (A貝層1~5・B貝層6~22) 実測図



第六図 出土遺物土器 (C貝層23~27) 実測図

2 石 器 (第七図, 図版第一〇)

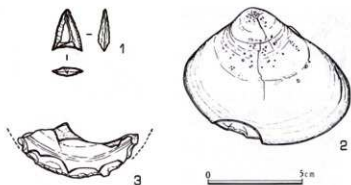
石鏃がC貝層から1点出土している。無茎の石鏃であって、基部が僅かに内湾し、側縁は直線状に近い三角形を呈する。全長22mm, 最大幅16mm, 厚さ6mmの大きさである。

3 貝 刃 (第七図, 図版第一〇)

ハマグリ(ハマグリの腹縁)に細かい刃部を作出したもので2点出土している。2は殻長90mm左殻腹縁の一部に刃部が認められる。おそらく未製品であろう。A貝層出土。3は破損品で腹縁に良好な刃部が作出されている。B貝層出土。

4 動物遺存体 (図版第一一)

① 貝類 各貝層から検出された種類は、腹足綱5種、斧足綱3種である。種名末尾のA・B・Cは出土貝層を示す。



第七図 出土遺物石鏃・貝刀実測図

A 腹足綱

クロアワビ
 サザエ
 ウミニナ
 アカニシ
 オオタニシ

B
 B
 B
 A・B
 B

B 斧足綱

マガキ
 ヤマトシジミ
 ハマグリ

A・B・C
 A・B・C
 A・B・C

クロアワビ

湾口部の海水の影響を受ける岩礁付近に棲息する。殻口部の破片が数片認められる。

サザエ

潮間帯の岩礁下に棲息する。蓋が1個出土している。大きさは32×37mmである。

ウミニナ

内湾の潮間帯の砂泥底に棲息する。殻高18mm程度のものが1個検出された。

アカニシ

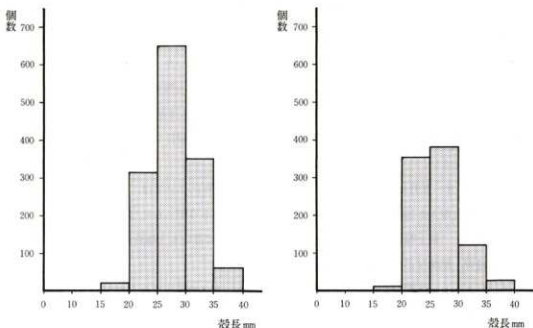
内海の潮間帯より水深20mの砂泥底に棲む。A貝層から1個、B貝層から3個の標本を検出した。殻高は60～70mm程度のものである。すべて殻口と周縁を打ち欠いている。

オオタニシ

水田や沼地に棲む貝である。破損した標本が1個出土している。

マガキ

比較的鹹度の低い水域に生育し、潮間帯の岩礁に付着する。B貝層から計測できる標本約30個が出土している。最大殻長は185mm、最小殻長は50mm、100～150mmのものが87%（29個）存在し完形品も多い。一般に生育が良好である。A・C貝層からは殻長は70～120mmのものが10個



第八図 ヤマトシジミ殻長分布図

近く検出された。

ヤマトシジミ

汽水域の砂泥底に棲息する貝で、本貝塚の主体となる種である。B貝層の殻を計測すると、大きさは殻長 18 mm の小型のものから 42 mm に達する大型のものまで認められる。量的に多いのは殻長 25～30 mm の中型のもので、出現率は 47% である。このありかたは殻長分布図から容易に理解できよう。A・C貝層においてもほぼ同様の傾向が窺われる。(第八図参照)

金子浩昌氏によると「貝塚形成当初ヤマトシジミは小型で、その後やや大型のものが捕えられ、再び小型化する過程がたどられているが、より広い貝の棲息圏をもつこのあたりでは、貝の選択がより自由にできたためと思われる¹⁾」と述べている。

ハマグリ

内湾の潮間帯や浅海性の砂質底に棲息する貝である。A貝層から 8 個、B貝層から 40 個、C貝層は破片が 1 個検出された。A・B両貝層のものを計測すると、殻長 38～45 mm の小型貝が 19 個、殻長 50～65 mm の中型貝が 17 個、殻長 80～90 mm に及ぶ大型貝が 12 個存在する。これらの貝は河口域の干潟から捕採されたものと思われる。

1) 金子浩昌「茨城町の縄文時代前期貝塚から出土した貝類」「茨城町権現塚遺跡」茨城町史編さん委員会 昭和 63 年 3 月

② 魚類 A・B・Cの各貝層からは若干の種類が検出されている。各貝層に共通して

みられた種類はクロダイとスズキである。この2種の魚類は、縄文時代前期前半の那珂川湾口部に位置する那珂湊市道理山貝塚、中丸川の奥部にある勝田市遠原貝塚などでも出土している。数量的な関係は不明であるが、他の魚類に比較して多いのではないと思われる。今回出土した魚類の部位骨のうちで比較的好く残っているのは、クロダイの前上顎骨、脊椎骨、鰭棘、スズキの下顎歯骨、主鰓蓋骨などである。クロダイは前上顎骨の長さから体長30cm前後、スズキは鰓蓋骨の大きさから体長40～60cmの個体であろう。エイの尾棘は小破片であるが、ヤスとして利用されたかもしれない。

昭和60年8～9月に発掘したB1地点の貝層出土の魚類については、整理の結果が報告されると、大串貝塚人が捕獲した魚類の種類と内容がよりいっそう明らかになってくる。

クロダイ 前上顎骨左1、同右1、破片4、ほぼ完形に近い右上顎骨は全長32mmある。この他に脊椎骨、鰭棘などが少量出土している。

スズキ 下顎歯骨左3、同右2、主鰓蓋骨4、すべて破片である。

エイ類 歯板は検出されなかったが、尾棘の破片1が出土している。現存長23mm。

③ 獣類 出土した獣骨は、シカとイノシシの下顎骨を含む破片が若干検出された。

シカは、B貝層からM3が残存する成獣の右下顎骨の折損した標本が出土している。鹿角は、自然面を残した角幹部の破片であり、刺突具などを製作する際に割られたものであろう。

イノシシは、下顎骨の正中部が出土している。歯牙の残存状態は下記のとおりである。

L (下顎)														
L (左)							r. (右)							
(P ₃)	(P ₂)	P ₁	C	(I ₂)	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	(I ₂)	C	(P ₁)	P ₂	P ₃	(P ₃)

記号下の線はその歯牙を具備する顎骨を示し、括弧内の歯牙は脱落していることを示す。

左右の犬歯には折損が認められる。下顎犬歯は、牙製品の素材に適しているため、このために切断されたものであろう。シカ・イノシシの下顎骨が、いずれも中央付近で打ち欠いているのは、おそらく骨髓を食用としたためであろうと考えられる。

この他の小骨片については未整理である。

第五章 まとめ

今回の確認調査は、(仮称)大串貝塚周辺におけるふれあいのまちづくり事業計画の一環をなすもので、貝層断面の観覧施設を建設しようとするために、貝塚の範囲を確認することが主な目的であった。

昭和60年の発掘調査時に設定したB1トレンチ北側に続く斜面に貝層が形成されていれば、ここを利用した観覧施設が地形的に最適であるけれども、この場所には全く貝層の堆積がみとめられない。次善の策としては、B1地点の貝層がほぼ東西方向に分布している事実を考慮して、この貝層の北端部、旧簡易水道施設の跡地南端部に確認トレンチを設定して調査を行った。

この調査の経緯と結果については、すでにその概要を記述してきたように、B1地点貝層の上端部に相当する小貝層が、近接するA・B・Cの3地点においてたしかめられた。貝層は、ヤマトシジミを主体にカキやハマグリなどを混入した良好なものであるが、斜面貝塚における貝層の形成過程を説明できる資料とはなりえなかった。しかし、本地点貝層の北端部のありかたを把握できたという点では、全く無意味な確認調査ではなかったと思う。

貝層の形成時期については、出土土器の型式的特点をみると、他の地点の貝層と同様に、縄文時代前期前半の花積下層式の新しい段階に編年できるものである。

一方、動物の遺体については、貝類、魚類、獣類などが、種類と数量は非常に少ないけれども発見されている。貝層を構成する主要な貝種は、昭和60年の調査でも指摘されているようにヤマトシジミであり、これに少量のカキ、ハマグリに他の若干の貝類が混在する状態が確かめられた。

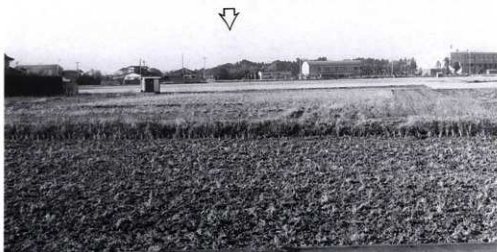
ヤマトシジミは、淡水と鹹水の入り混じった汽水域に棲息する貝であることを考えれば、この付近一帯に採貝活動が行われるラグーンが形成されていたことになる。また、カキやハマグリのような貝は、より離れた鹹水の影響を受ける湾口部に棲息場所となるので、主としてこの付近から採集したものと思われる。クロダイ、スズキ、エイなどの魚類についても、その漁撈活動はもっぱら河口域を中心に行われていたものであろう。

大串貝塚人の生活行動圏は、台地の近くに展開するラグーンをはじめ河口域の岩礁、海浜までを含めた広い範囲を考えなければならない。

写 真 图 版



貝塚の遠景（南より）



貝塚の遠景（東より）



確認調査区の現状（西より）



確認調査区の現状（東より）



第1区東壁の土層堆積状態（西より）



第1区南壁の土層堆積状態（北より）



第2区南壁の土層堆積状態〈北より〉



第3区南壁の土層堆積状態〈北より〉



第4区南壁の貝層・土層堆積状態（北より）



第4区南壁の貝層・土層堆積状態（北より）



第4・5区南壁の土層堆積状態〈北より〉



第6区南壁の土層堆積状態〈北より〉



第4区A貝層の状態（北より）



第4区B貝層の状態（北より）



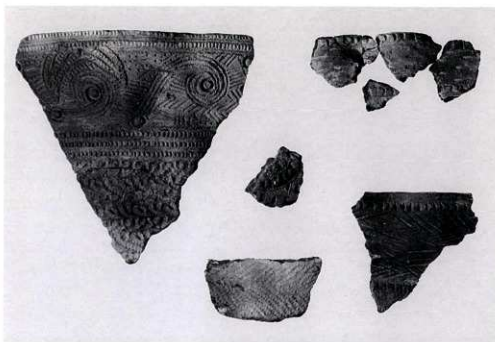
第4区C貝層の状態〈西より〉



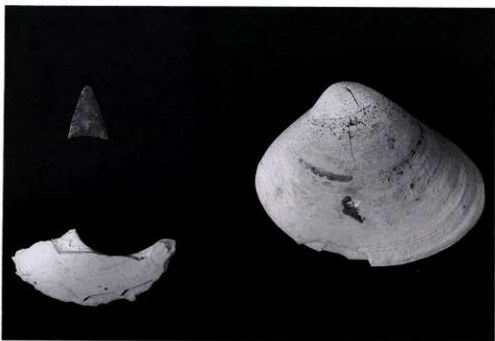
第4区C貝層の土器出土状態



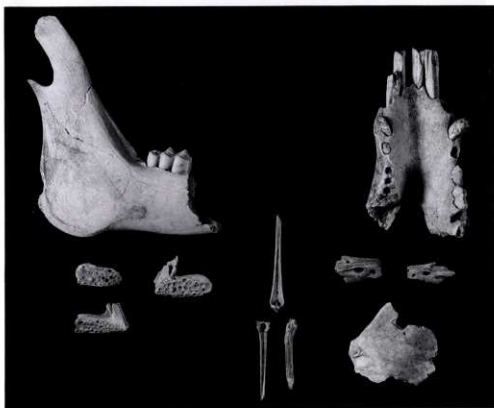
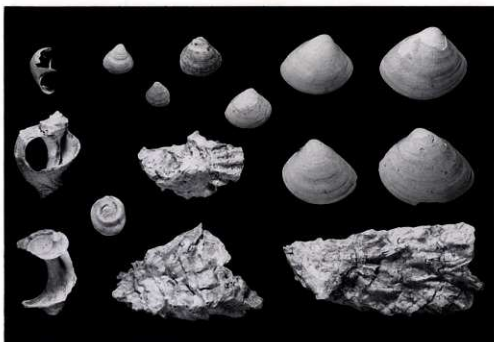
縄文土器 (A・B貝層出土)



繩文土器 (C貝層出土)



石鏃・貝刀



動物遺存体 (貝類, 獣類, 魚類)

常澄村大串貝塚確認調査関係者（事務局）

中村 政	教育委員会教育長
篠原 秀	教育委員会社会教育課長
入野 弘文	教育委員会社会教育係長
宮崎 賢司	教育委員会社会教育課主幹
飛田 邦夫	教育委員会社会教育課主事

確認調査従事者

井上 義安 水谷 正 鈴木 浩子 李 舜雨 富施 綾子 渡辺 恵子
渡辺 敬子

整理作業関係者

井上 義安 鈴木 浩子 水谷 正

今回の確認調査に当たっては、常澄村教育委員会の諸氏、作業員の方々から格別のご協力を賜わり、大変意義のある調査ができ、ひきつづき短時日ではあるが一応の整理作業を終了させて、ここにその報告書を上梓することになった。この間の関係者各位のご高配に厚い感謝の意を表する次第である。（井上・水谷・鈴木）

大串貝塚

発行 平成三年三月
編集 常澄村教育委員会
印刷 ワタヒキ印刷株式会社
